

東北芸術工科大学 デザイン工学部

建築・環境デザイン学科 年報2021

Tohoku University of Art and Design

Department of Architecture and Environmental Design, Annual 2021



人間、社会、自然の関係を結び直すデザイン



TOHOKU UNIVERSITY
OF ART & DESIGN

はじめに

2022年2月24日。ロシア連邦によるウクライナへの軍事侵攻は、第二次世界大戦後に築き上げられてきた国際秩序を根底から覆すこととなりました。本稿を執筆している2022年5月時点、停戦の見通しは立たず、日々、軍事侵攻による被害状況、核の脅威が報道されています。国内においては、日々、新型コロナウイルス感染者数が報じられ、収束の兆しを感じる事が出来ずにいます。しかし、日々、国内外の様々な情報に触れるなかで、我々は何れだけその情報をリアルに感じ取っているのでしょうか。軍事行為による死者数、新型コロナウイルス感染者数が報道されているにも関わらず、それは単なる統計データであり、現実に行き起きている事がどこか違う世界で起こっている事のように、モニターの奥に映る世界と今我々が生きる世界には大きな隔りがあることを感じます。つまり、私たちは、情報社会によって知り得る統計データによるリアリティと目で見て手で触れる身体的リアリティのふたつを同時に手にする世界で生きていけると言えるでしょう。

今年度の年報は、「志村先生が送る 野帳に描く日常スケッチのススメ!」と題し、2021年10月に本学本館1階THE WALLにて開催された志村直愛教授の個展「日常茶飯事描写展」についての記録とスケッチを描くことの意味、意義について特集いたします。2018年から野帳に描写されたスケッチを広げながらスケッチに対する考えをお聞きするなかで、スケッチは、他者にデザインの意図を伝える伝達手段である、一方で、機微な情報を咀嚼し、脳内に蓄積させる手段であると感じさせられました。

本学科が標榜する「人間、社会、自然の関係を結び直すデザイン」には、身の廻りの状況や物質から発せられる情報をつぶさに観察し、実体あるものとして把握することが不可欠であります。

建築デザイン分野におけるCG表現が一般的になり、コンピューターのモニター内でモデリングされた構造体にマテリアルを貼り付け、Photoshopで加工し、それらしい建築表現が容易になるなかで、果たして設計者（学生）は、建築を構成する部材の重さ、素材の特性、敷地の地勢についてどれだけ実体的に感じ取り、創造しているのでしょうか。CG表現による利便性と表現の可能性を感じつつ、時折、重力が存在せず、都合の良い画角で空間をアウトプットできることにより、クリエイティビティにとって最も大切なリアルな感覚が欠如しているのでは、という危機感を感じます。

本年報を通して、スケッチの意味、意義を感じ、スケッチを通して見える世界に触れることで、演習作品がより実体的なものとして創作される契機になることを願っています。

(佐藤充)

目次

特集

2021年10月に本学本館1階THE WALLにて、志村直愛教授の個展「日常茶飯事描写展」が開催されました。展示空間を埋め尽くす緻密かつユーモアのある作品は、志村教授のお人柄を感じさせるものでした。

今号の年報では、「志村先生が送る 野帳に描く日常スケッチのススメ!」と題し、なぜスケッチを描き続けるのか。スケッチの目的と魅力を探りながら、CG表現が一般的になった現状についての課題を考えてみたいと思います。

建築・環境デザイン学科 志村先生が送る… 6
野帳に描く日常スケッチのススメ!

教育報

年度ごとに、演習課題を中心とする教育の成果をまとめています。

1年生では、前期に造形や表現の基礎となるデッサンや立体造形、空間造形のトレーニング、後期に設計の基礎となる図学・製図、CADの習得や施工体験といった演習を設定しています。

2年生は、木造軸組構法から成るタイニーハウスの設計を通して木造建築の構造の基本と応用を学ぶ演習から始まり、続いて建築や環境をデザインする上では欠かせないフィールドワークについて学びます。後期には、住宅とその周囲に展開するランドスケイプを続けて設計し、建築とその周囲の環境を一体的に計画します。1年を通じて建築と環境をひとつながりのものとして総合的に考える課題を設定しています。

3年生は、2年生での総合的演習を踏まえ、前期前半/後半、後期前半/後半の4つの期間のなかで、各自の興味や関心、進路に併せて演習課題を選択します。建築、ランドスケイプ、都市や集落のリサーチ、そしてそれぞれの領域を横断する内容の課題を設定し、地域の様々な問題に目を向け提案につなげてゆきます。

4年生ではこうした学びを経た集大成とし、各自が課題を探り、調査・研究を行い、卒業論文、あるいは卒業設計へとまとめてゆきます。

1学年 建築・環境基礎演習 10
建築・環境施工演習

インテリア基礎演習 11

2学年 タイニーハウスの設計 12
フィールドワーク入門

住宅の設計 13
住宅のランドスケイプデザイン

3学年 エコタウンの設計 14
リノベーション演習

市街地計画 15
農村計画

構造デザイン ドイツ・山形の都市分析と サステイナブルプランニング	16
---	----

地域社会の核となる機能を擁した図書館 ランドスケイプ総合デザイン	17
-------------------------------------	----

研究報

学生生活の集大成となる卒業研究・設計、修士研究・設計は、学生たちが自ら社会の様々な課題と真摯に向き合い課題設定を行い、論文あるいは設計というかたちでまとめます。ここでは、1年間を通して課題と向き合い提案された研究成果をレビューします。

併せて、各研究室や学生・有志による地域と密着したプロジェクト、学科で主催した各種講評会の概要、学生たちの学外でのコンペティションで得た評価等についてご紹介します。

卒業研究・設計	新潟市古町再生案	18
---------	----------	----

十年の皮膜 百年の構造 NEO墓地	19
----------------------	----

山形県庄内町家根合 石巻寿町通りをまちやどに	20
---------------------------	----

ローカルプレイヤー主導による 既成市街地再生に関する研究 クラシトマナビノカサナリ	21
---	----

総評	22
----	----

修士研究	地方都市改造論2050 グリーンビルディングの研究と提案	23
------	---------------------------------	----

プロジェクト 地域との連携	鮭川村空き家再生プロジェクト 気仙沼市大沢地区復興支援プロジェクト	24
------------------	--------------------------------------	----

只見駅周辺魅力向上事業 竹の露酒造りニューアルプロジェクト	25
----------------------------------	----

プロジェクト セルフビルド	蔵プロジェクト ツリーハウス	26
------------------	-------------------	----

プロジェクト 環境	早戸温泉環境整備実習	27
--------------	------------	----

プロジェクト リノベーション	湯野浜温泉 エリアリノベーションプロジェクト	27
-------------------	---------------------------	----

プロジェクト 歴史	山形市吉野宿地藏堂実測調査	28
--------------	---------------	----

各種講演会	環境的未来型 安居昭博氏	28
-------	--------------	----

環境的未来型 ヤン・ポリフカ氏、永井宏治氏 ワンデイプロジェクト 山道拓人氏	29
---	----

コンクール等 受賞者の紹介	JIA東北建築学生賞 JIA東北学生卒業設計コンクール	30
------------------	--------------------------------	----

次世代店舗アイデアコンテスト2021 第15回長谷工住まいのデザインコンペティション 芸術工学会 せんだいデザインリーグ2021 日本建築学会賞	
--	--

建築・環境デザイン学科 志村先生が送る…野帳に描く日常スケッチのススメ!



絵を描くことは決して特別なことではないはず

3歳児の頃にはみんな、「おえかき」「おゆうぎ」で「おうた」歌うなんてことはのびのびと自由にやっていた。だが、あれから15年（あるいはそれ以上）その後何故か描くことだけが特別視されるようになり、苦手意識と拒否感が醸成されてきている人が多いのはなぜだろう。「カラオケ」があるのだから「カラスケッチ」があってもいいはずなんだけど、何故かそんなものは無い。「一緒にカラオケ行かね？」っていうナンパはありきたりだけど、「一緒にデッサンしませんか？」って誘ったらドン引きされること請け合いです。

描くことが特別視される中に、美術芸術教育の問題もありそうだが、何より自虐的に捉える悪い影響もあるように思う。褒められて伸びた、^{けな}貶されてやめた…そんな声も聞こえてくるが、絵というのは真実を写す「写真」と違って、その人その人の個性が乗り移るもの。だから十人十色があたりまえで、全く一緒だったらむしろ不気味なのだ。だからそれぞれの思った通りでよい。3歳の頃のように好き勝手にやってよいのだ。

スケッチは、記録、資料、果ては栄養となる

自分で描いた絵を振り返ってみてみると、その時の情景、状況を鮮明に思い出すことはよくあると思う。スケッチは、そのものをよくよく観察して自身の手を動かして形をなぞるわけだから、カメラのレンズを通してメモリーカードに蓄積される情報

とは異なり、眼で得た情報が脳を経由し、色や形を理解し、手からアウトプットされる。デジカメで記録するよりもずっと時間と手間はかかるが、その分、記憶に蓄積される情報も多く、自分自身の記録、資料、果ては栄養となり、また将来にわたり貴重な記録として残し伝えていく大きな意味を持つ成果となる。デジカメやCADが当たり前になった今こそ、「デジタル」の前に自らの手で描く「アナログ」の意味、意義を再認識し、どちらも操れる達人になっておきたい。

スケッチにおいて下手は禁句である

描くことは、建築や環境デザインの世界では、完成予想のパーズはもとより、構想検討段階でのラフスケッチなどで、クライアントやオーナーとの意思疎通にも極めて有効であり、創り手としても、生むべき形を考えるプロセスを助ける、デザイン行動には必須重要アイテムである。パーズやイメージスケッチのように情報伝達手段として絵を使う場合は、相手に伝えたいと思う意思に近づいた完成品を目指す必要が生じる。そこは改善、練習が必要になろう。そのために、まずは自身の描きをよくみてみたい。それにあたっては一つ提案。あなたの脳の中から以下のひとつの言葉を消去してほしい。この言葉は日本語の中でも珍しく相手に対して著しく危害を加え、自分に対して自信を喪失させる怖るべき悪魔のことばだからだ。今後絶対使わない方向でも困ることはないだろう。

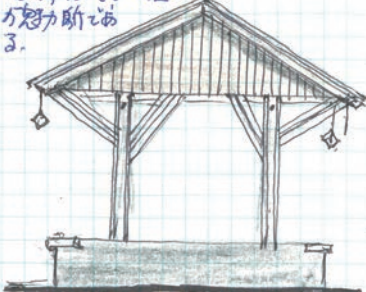
長井線長井駅

2018.10.22日

万々長井線乗りもし木造の長井駅駅舎を模倣化か?

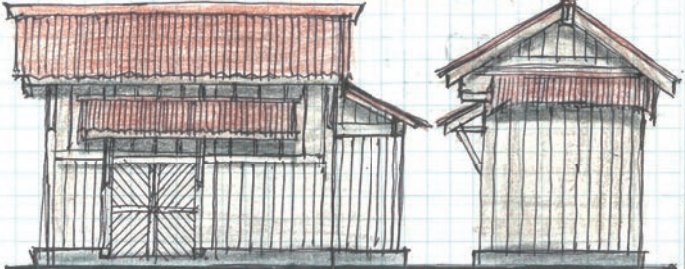
長井駅本屋は、新市庁舎計画にけ
ない取り壊しの可能性が大まか
な予定だ。ポスターを把握して、
パインキートンとメリアル企画のため
外観用取捨表を準備しておく。

番外編 プラトホーム上屋。駅の手前の島
の一本だが、その上屋
が魅力だ。
る。

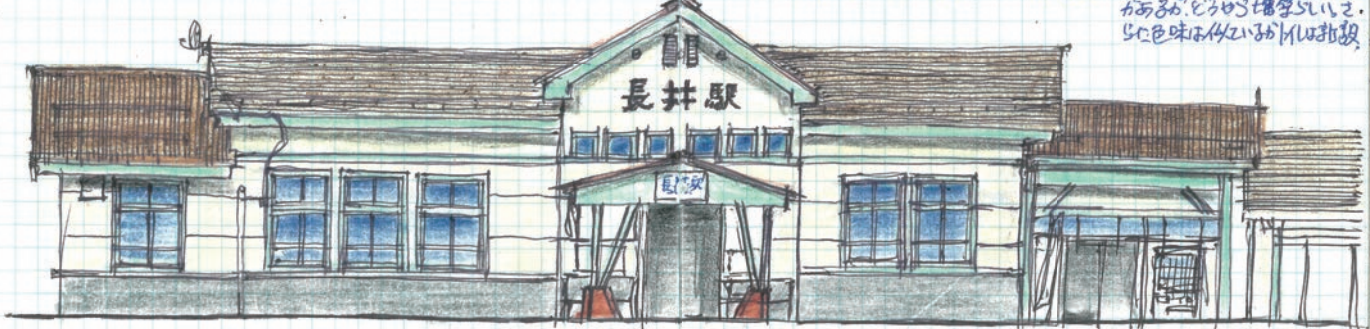


ホームを跨ぐように2列の柱で支持、この
柱上部60°30°の角度で軒先を支える
Y字変型の支持柱が左右対称に取れる

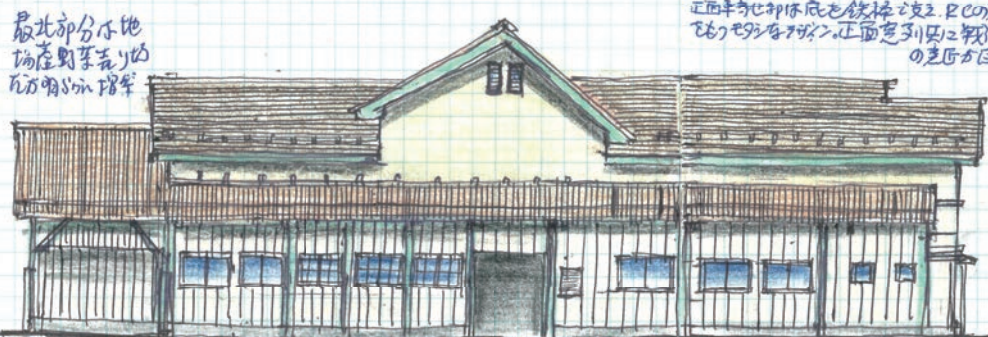
駅本屋の裏手。(便所棟の西側)にある破損した建物は、RC構造がデザイン的に優れている。
シンプルで切妻平入りで、3/4切妻は斜めの貼り板で、Rのアップである。
駅本屋のデザインは、思わぬ意匠で、西と南に庇を載せられる。



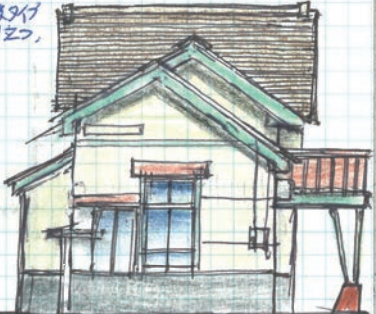
駅本屋正面の面を見れば、車寄せが左右非対称であることがわかる。現在入
口は左側地味キートン。右は売店、水戸と符合帯とある。左手正面に出入口
がある。右側は現在地場産材等の売店
がある。色味は4色以上の色味がある。



最北部分の地
場産材を並べ
た部分の増築



正面中央部は底を鉄骨で支え、RCの基礎
で、その上を木造で、正面窓列は、
の差匠が目立つ。



本屋下へ木造(強弱側、駅舎の1/2)両面を削、中央部は切り取り破損区を通行
させるといい。全体に底流っている。破損下へ木造の柱で、底下は鉄骨造

南側立面、思わぬ以上に鉄骨造は、
屋根は2段構造で、車寄せがモダン。

原寸の野帳

それは「下手」という言葉。

それ無しでは不便…という方に、貶して終わるこの言葉の代
わりの言葉も授けたい。

それは「自分が相手に伝えたいと思ったけれどうまく伝えら
れなかった」…である。

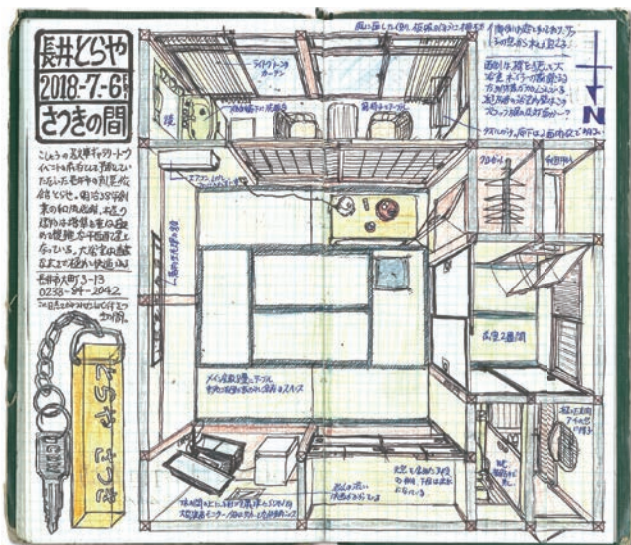
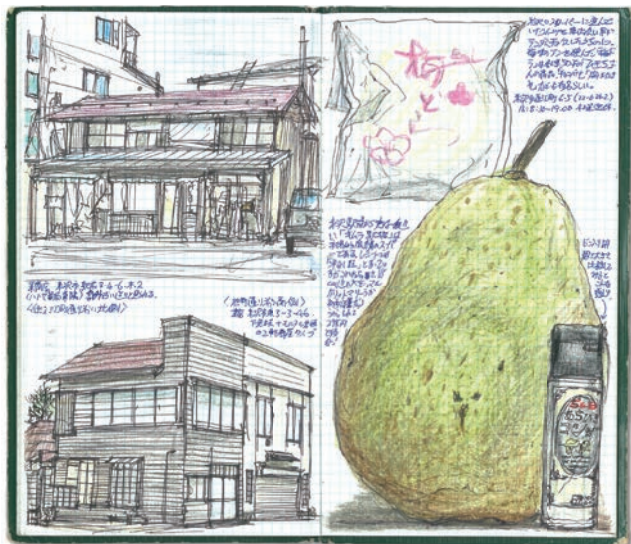
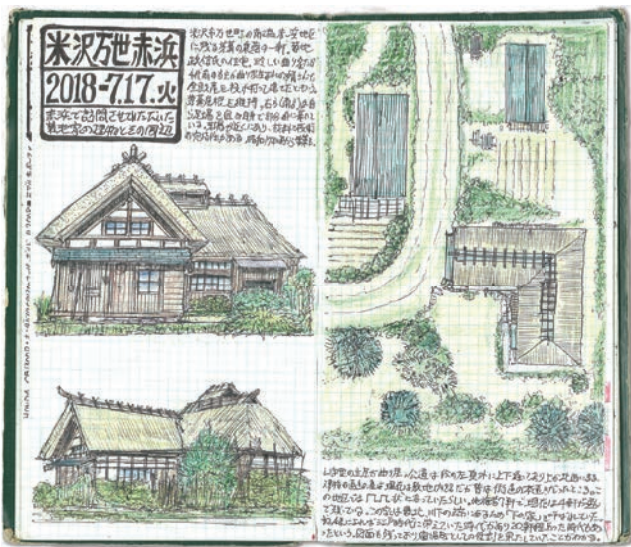
失敗した絵の正体は、上記の通り「自分が相手に伝えたいと
思ったけれどうまく伝えられなかった絵」なのである。それは
「下手」の一言で断罪する無責任なものではない。なぜ伝わら
なかったのか、どう改善すればよいのかという続きのある重要
な示唆を含んでいるのだ。絵で言うなら、形が違っている、色

が正しくない、雰囲気がいまいち…など原因はいろいろある。
それぞれの問題点を直視して、それからゆっくり改善すればよ
いのだ。

野帳に描く日常スケッチのススメ!

そんなわけで、まずは、スケッチを好き勝手に、日常茶飯事を
気軽に描くという意味で、スケッチブックへの記録残しを推奨
する。

ここで紹介するのは、1冊200円のグリッド罫線入りの
KOKUYOのSKETCH BOOK 製品記号「セ-Y3」(基礎演習で



は野帳と呼称)である。

この商品は、1年生の施工演習でも使用することになっているので、今更ではあるが、それを課題ではなく、自身の大人の絵日記に昇格してあげればよいのだ。この取り組みは、実は数年前の施工演習の模範演技として描いてみたのがスタートだったのだ。個人的には、日常的にどこでも手に入る文具を用いて、気軽に構えないために、あるいは失敗の理由付けとするためにも(笑)縛りを設けている。ここでは、書き味の良いボールペン「JETSTREAM」を使用し、仕上げには「色鉛筆」で着色。色鉛筆は手元があればスイスカランダッシュ社製でも、100均のものでもよしとする。紙への「乗り」を重視すると必ずしも高ければよいというものでもない。また100均のなかにも捨てがたい色があることも…。

描くものは、絵日記なので日常的な記録や風景とする。多いのは青春18切符でめぐる旅行の記録、列車の車窓から見える民家をはじめ、みんなでの宴会や泊まった宿の部屋を上から見下ろして描いたり、噂のラーメンやスイーツ、駅弁をいかにそれらしくボールペンで描けるかに挑戦するイメージである。なので専門的記録ではなく、「あ、これ知ってる!」「美味しそう!」みたいな反応で一般の人にも馴染みやすいスケッチになるのである。これが意外に専門に偏りやすい私たちの世界ではとても大事な視点で、対人コミュニケーションのツールになるという特典も指摘しておきたい。

日常スケッチの描き方

描き方は、まずは画面構成をお洒落に考えて、紙面に鉛筆で大まかな形をレイアウトする。決めたら少し形をとってラフスケッチにし、徐々に細かい部分を加えていく。形が整ったかなと思ったら、ボールペンで清書して、鉛筆線を消す。あとはぼらけた山のような色鉛筆からイメージ通りの色を選んで楽しく淡く着色を楽しむ。モチーフの色によるが薄く塗り重ねると失敗が少ない。もちろん自分の技量と勇気にあったやりかたで好き勝手自由で全然構わない。

因みに、4年目にして20冊を数えるスケッチの中で、絵としてその場で直書きしたものはほんの1割程度、あとは全て写真に撮ったものを後で描き起こしている。それは蛇道? そりゃあだって、その場に30分も居座るほどそんな暇は私にはないのだ。かの日本画家平〇大先生だって、タクラマカン砂漠に一週間もキャンバスを構えてずっと現地で描かれたわけではないのだ。イメージを体感したら、写真を頼っても何ら問題はない。大事なことは「記録を残しそれをよく見ること」。

自身のスキルアップは自分が思った通りに気軽にやればよい

…蛇などどこにもいないのだ!

それでもスケッチが苦手な人には、最初は慣れのためのトレースをおススメしたい。紙面の大きさに合わせた枠のwordに配置したい写真をレイアウトし、モノクロ出力。裏面に3~6B程度の鉛筆を寝かせて全面黒塗りをして、表に返して紙面の上に軽く載せて仮止めしたら、シャープペンで描きたい形を写真の上からなぞる。と、紙面になぞった通りの線が転写されるので、それを参考にボールペンで清書して着色すればよい。手芸用のチャコペーパーなどを敷いてもよいが、この方法が安くて簡単。これを繰り返す、形になれば、次第にガイドなしの直描きにトライしてみてもうすでに少し腕が上がっていると思う。それも蛇道? いえいえ、これは個人の記録なので好きなようにやればよい…蛇などどこにもいないのだよ…。

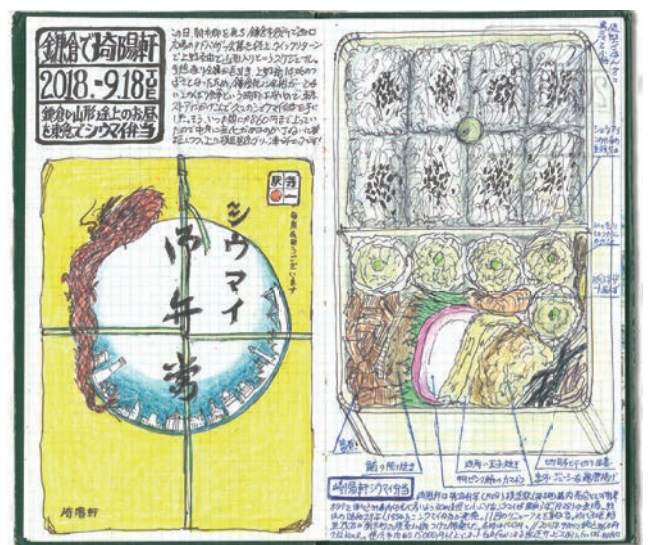
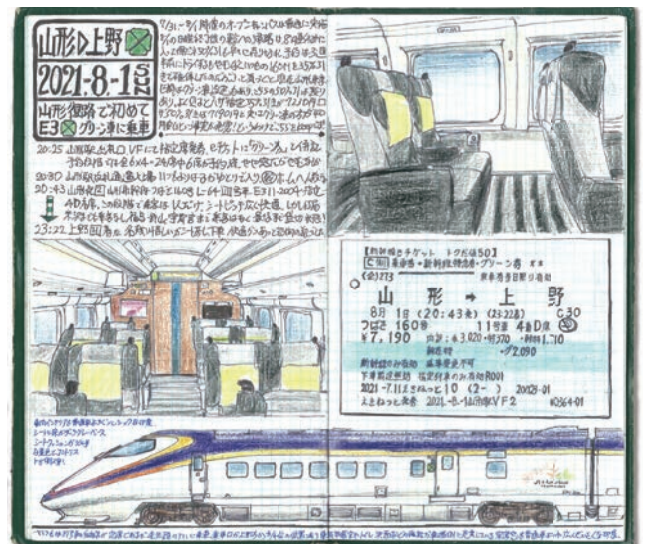
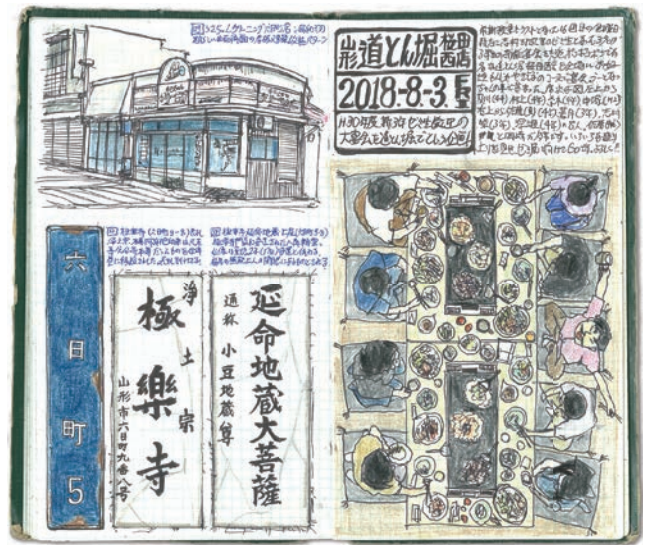
それと、永く続けるためには、無理は禁物。格好良く最後まで仕上げようと思うと続かない。気楽に、ラフスケッチで留めて、いつか時間がある時に思い出を振り返りながら仕上げよう、それもまた楽しみ…くらいの気持ちがよい。

こうした日常スケッチの取り組みは3年前の芸工祭での恒例「しむけんゼミ展」でもお披露目したのだが、喰いついて実践してみました! というのが、なんと学科学生ではなくその保護者の方ばかり(汗)大人受けはよいようだが、是非みなさんにも喰いついてほしいところ。「俺こんなの描いたぜ!」「私のも観て見て~!」みたいな会話が弾むようになったら、設計やデザインの課題もきっと楽しくなるに違いないと思うのだが…

(志村直愛)

今回、志村先生から特集についてお話を伺うなかで、野帳に描かれたスケッチを他者に見せた時のリアクションについて話す様子はどこか悪戯を楽しむ少年のようであり、純粋にスケッチを楽しむ眼差しが印象的でした。

本稿を契機に、野帳を携え新たな世界にダイブしてみてもいかがでしょう。(佐藤充)



1学年 建築・環境基礎演習

2020年度はコロナ禍の影響でオンラインとなった本演習も、2021年度は十分な感染対策を行いながら対面での実施となった。初めてのデッサンや模型制作など、デザインの基礎技術を経験し習得することが本演習の軸であるが、コロナ禍で獲得したオンラインギャラリーの仕組みを活かし、他者の成果や技術から学ぶ機会の充実を図った。さらに、最も大事な手を動かし描く・造ることの経験に加え、その過程で得られた気づきを言語化し共有することも昨年から強化している。集団で学ぶ意義は、やはり同じ時間と空間を共有した学生が、多様で多彩な違い、無数の感性やアイデアを知り、自身と突き合わせて幅を広げることにある。コロナのわざわいが転じ、そして地が固まった。改めて記せば、本演習で最も大事にしていることは観察である。デッサンや模型の精緻さ、完成度も評価するが、数多く描き、自身の工夫で立体を作りながら観察し、もの本質に気づくことを大事な到達点にしている。今年度もいい意味での学生のもがきが多くあった。(渡部桂)



他者の作品から学ぶ（上） 初めての建築模型制作（下）

1学年 建築・環境施工演習

本演習は大学に隣接する都市公園「悠創の丘」がフィールドである。2つのエリアを隔年で交互に手入れしながら里山環境や自然の素材に触れ、それを材料としてその場に相応しい構造物の計画・設計・施工を行う。屋外で行う演習のため、コロナ禍の2020年も十分な感染対策のもと実施し、途切れることなく今年で13年目を迎えた。

今年度は山形市街地を見下ろす「悠創の丘」西端が対象地であった。20年以上前に当時の学生が植樹したコナラ・ミズナラが成長し樹林になっている。かつての里山が伐採と更新を繰り返したように2019年に一部を伐採した。そこから2年経過し、切株から新しい芽の生長が見られたが、林床に日光が入ったことで下草や蔓が旺盛に繁茂したため、草刈りをしながら公園としての役割を回復する整備を行った。

学生はグループごとに利用者の行動を想像して空間特性を読み、現地の材料を活かしながら柵や階段、腰かけ、資材の集積ヤードを施工した。生きた環境に触れ、実寸大でものを造る経験は多くの実感と気づきを学生にもたらした。(渡部桂)



杉の間伐（上） 杉人工林の現状を学ぶ（下）

1年生が最初に自ら空間を発想し、創造する設計演習である。立方体という抽象的な空間と向き合い、模型製作と併せて手を動かして、幾何学的な操作によって内部空間を熟考し、スケール感を体得することを目的としている。最初は、スケールを把握しやすい4畳半に相当する2.7m立方の「茶室」をつくることから始め、建てる場所や見える風景、光や風をイメージしながらシンプルな操作による空間造形を行う。そして次に、その立方体の空間に幾何学的な空間操作を施すことによって空間を変容させ、その形態の意味を探る。最後に、各辺の長さが2倍となる5.4m立方の空間を何らかの操作を施して分節する課題へと、段階的にスケールと空間の移動という要素を加えていき、スケール感と建築的な操作に慣れていくことを目指した。段階的に建築的創造へと発展していく3つの課題毎に、山形・仙台で活躍する本学卒業の若手建築家をゲスト講師としてお招きし、講評していただいた。プレゼンテーションは考えた内容だけではなく、模型の精度から伝わる印象が評価に影響を与えること、建築の評価は一樣ではなく多様であるということ、講評から感じ取れたのではないだろうか。スケッチや模型製作を通して粘土をこねるように手を動かし、出来上がる空間はどのようなものなのかを考え、他者に伝える。この経験が、今後の設計課題の糧となることを願っている。

「2.7m立方の茶室」 渡邊咲来

海に浮かぶ茶室である。海風を存分に感じることができる空間をイメージし、海面から浮かせた床と四周は壁ではなくカーテンが風に靡き、ゆらめく空間となっている。立方体を浮かせるための構造まで検討された優れた作品である。

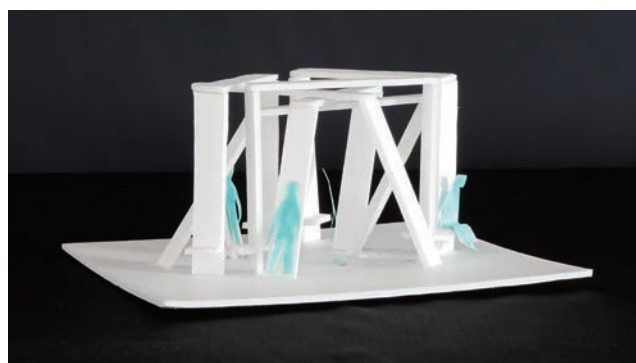
「2.7m立方の空間の変容」 豊島爽楽

2.7m立方を帯状に6分割し、その帯を傾きや向きを変えながら交錯させた作品。帯の傾きによって、それにもたれかかったり、座ったりすることができ、他者との適度な距離を保ちながら集まって佇むことができる空間となっている。手を動かすことによって見つけた空間の意味を巧みに表現した作品である。

「5.4m立方の空間の分節」 山田晏璃

シンプルな構造体が90度回転しながら積み重なる空間。5.4m×5.4mの平面を2分割した床と階段が、螺旋状に積み重なることで、多様な居場所を作り出した作品。シンプルな設計ルールを設定し、単純な操作によって展開された多様な空間は課題の意図を的確に捉え、非常に魅力的な作品に仕上がっている。

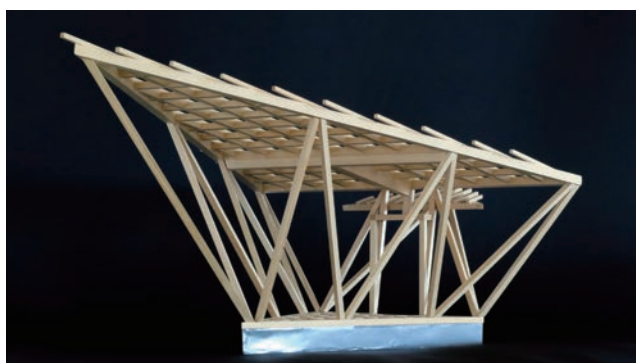
(佐藤充)



課題1 渡邊咲来 (上) 課題2 豊島爽楽 (中) 課題3 山田晏璃 (下)

2学年 タイニーハウスの設計

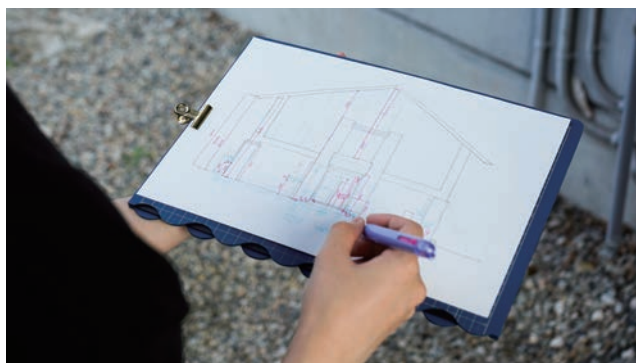
2年生にとってはリモート前の学生と同様に、演習室に新しく与えられた各自のスペースでの課題への取組みとなった。リモートと異なり、まわりの同級生たちの進み具合を眺めたり、その場で情報を共有したり、あるいは一緒に悩んだりすることのできる教育の場の大切さを改めて感じる事ができた。課題内容は建築設計の第一歩となる、木造軸組構法によるタイニーハウスの設計である。各自が考えた機能とそれにふさわしい学内の平坦な場所を敷地として、床面積7.3m²の空間を作り上げるものである。1年次のインテリアの課題とは異なり、部材をどのように組み合わせたら構造的に成り立つのかを意識しながら設計する必要があり、その理解を深めるために1/10の軸組模型を製作する。最優秀の真壁洋志の作品は、木々に囲まれた敷地に、畳半畳の大きさの9つの空間を床の高さと向きに変化を付けて立ち上げた様子が、意図した鳥の巣箱らしい憩いの場の雰囲気を醸し出している秀作である。関根晃人の作品は、三角形で構成された船体のような平面と立面が本館の大屋根に呼応したダイナミックな造形であり、図面や模型精度も秀逸である点が評価された。(山畑信博)



最優秀賞 真壁洋志（上） 優秀賞 関根晃人（下）

2学年 フィールドワーク入門

2年生前期後半の課題は「環境計画演習1」。その名の通り、環境デザイン系の最初の課題として、建築や環境デザインの基礎教育の一つである現場からの情報を収集、分析し、デザインのための素材とする、いわゆるフィールドワークのノウハウを実践的に学ぶ演習である。具体的には、建築のフィールドワークとして、建築の内部空間の実測と清書作図、外部空間の実測と清書作図、建築から町、市街地へスケールをあげて、市内中心市街地七日町を対象にwebによる地区の文脈解読、町並みの連続立面、道路断面の実測と図面作成、地区のポテンシャル解読と立体作図表現までを1週間単位の課題としてクリアし、最終的にすべての成果をA4版の報告書としてまとめ製本する。本年度はコロナ感染対応の緩和措置により、昨年実施できなかった少人数グループ組成による大学キャンパス内建築の外観実測作図が実施でき、役割を分担しながら大規模建築を調査する団体フィールドワークの体験も果たすことができた。ここでの経験は、3年次の市街地計画での現地調査や、文化財、町並み調査などより実践的な業務の即戦力となるスキルアップにつながる事が期待できる。(志村直愛)



大学キャンパス内建築の実測の様子

2学年 住宅の設計

具体的な用途を持つ複数の空間で構成された最初の本格的な演習課題は、一番身近な建築といえる住宅の設計である。大学側の1つの街区を12の分譲地に見立て、それぞれの敷地の特性を読み解き、住まう家族を想定して設計する。12の敷地には日照条件、接道条件、高低差など条件が異なり、それらに加えライフスタイルも異なるため、多様な住まいの姿が立ち現れる。

最優秀の早坂愛佳の作品は、「共生」というコンセプトから森の中に住まうことをイメージし、半地下の暗く落ち着いた寝室と、内外の仕上げが連続するリビング空間を有するものであり、全体の構成と卓越したドローイングと模型表現が評価された。小畑つむぎの作品は、道路と緑道を繋ぐ道を設定し、キッチンカーを駐車し近隣の人々が集い、通り抜けられるという計画に対し、住まい手のプライバシーに配慮しながら、採光を得るために複数のボックスが上下にずれながら全体を構成するという住空間の細部にまで配慮が行き届いた作品である。大胆なコンセプトと繊細な設計のバランスが高い評価を得た。

(佐藤充)



最優秀賞 早坂愛佳（上） 優秀賞 小畑つむぎ（下）

2学年 住宅のランドスケープデザイン

本演習は、通常7～8週連続で構成される他の演習と異なり、前半3週で住宅敷地および周辺の環境調査を行い、その後7週の住宅設計を経たのち、後半4週で住宅敷地のデザインを行う。対象地は大学に隣接する住宅街区で12の区画を設定した。近年、敷地面積が縮小傾向にある住宅事情に合わせて、街区全体で共用する遊歩道を設定し、デザインの対象に加えた。後半4週ではランドスケープデザイナーの森山雅幸氏、工藤まい氏、佐々木愛奈氏に特別講師として指導いただいた。

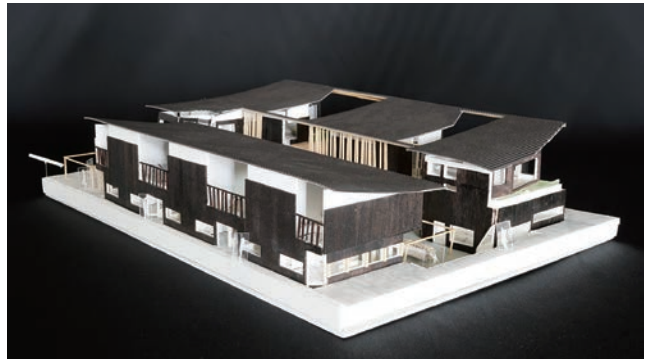
最優秀の吉田葵葉は、占有する敷地と共用する遊歩道空間の境界を曖昧にし、まるで広い公園に住宅が存在するような屋外空間の在り方を提案した。住宅に明確な玄関がないことも作用し、住人の屋外での自由な行動に寄り添った地表のデザインがなされた。微地形を読み込んだ造成も丁寧であった。優秀賞の関根晃人は、金属感のあるハードな表情の住宅とナチュラルで有機的な外部空間を、敷地の高低差も活かしながら、視覚的かつ実用的につないで融合させ、コントラストが利いた空間を生んだ。(渡部桂)



最優秀賞 吉田葵葉（上） 優秀賞 関根晃人（下）

3学年 エコタウンの設計

七日町の中心部に位置するエコタウンの設計の課題である。都市的な文脈を加え、複合施設（商業施設）的な要素を取り込み、都市におけるエコタウンを求めた。エコタウンである以上、日射取得、日射遮蔽は重要な要素である。そういう自然条件と都市的な社会的条件を併せ持った複合施設が求められた。場所は七日町の中心部、すぐ近くには高層マンションや御殿塚がある。猪野航誠の案は、職人である住民が店舗併用住宅によって、町に開くところ、コミュニティを作るところの両面を持ち合わせているプランである。断面方向にも工夫され、まさに都市の魅力を享受できるものとなった。吉田紅葉は硬くなりがちなヴォリュームスタディの追求の末、柔らかい形の水平的な要素を巧みに取り入れ、優しい空間を表出させた。（竹内昌義）



最優秀賞 猪野航誠（上） 最優秀賞 吉田紅葉（下）

3学年 リノベーション演習

身近にあるパブリックスペースを中心としたエリアリノベーションの課題。点と面のリノベーションの組み合わせにより、エリア全体をより豊かな空間へと変えていくプログラムである。石井大智は、大学に近い、あまり人影のない公園と、それに隣接する空き家を発見。両者を繋ぎ合わせることで、お互いの可能性を引き出すデザインを提案した。道路に屋根をかけるというシンプルな空間操作で、2つの場所に新たな意味を与えた。この作品が示唆するように、今後の公園は、他の機能と組み合わせることで再生し、地域のキャラクターを引き立てる場所となっていくだろう。一方、柴崎愛美の作品は、風景のリノベーション。日常で何気なく通り過ぎていた河川敷だが、丁寧な観察により、人々が関わる手がかりを発見。ここに小さなデザインを加えることで、ちょっとした居場所や自然を味わう時間が生み出されそうだ。コロナ禍で人々は屋外のパブリックスペースの可能性に改めて気がついた。この作品のように、ランドスケープと建築が融合したような作品から新しい感受性を読み取れた。またアウトプットもユニークで、全編動画である。表現の仕方も変革の時か。（馬場正尊）



最優秀賞 石井大智（上） 最優秀賞 柴崎愛美（下）

3学年 市街地計画

環境計画演習3は、2年時のフィールドワーク入門で培った現地調査のテクニックを活かし、具体的な市街地の敷地を設定して現場での調査から提案までを体験する課題である。コロナ禍の行動制限緩和を受けて、久々に現場での現地踏査、資料調査などを通じて、ライブの現状取材、特徴分析、またその評価から、町のポテンシャルを向上させるリアルなハード、ソフトの提案をまとめる課題である。成果についてはA1大3枚以上のプレゼンボードにまとめ、エスキスを繰り返しながらバージョンアップを図るグラフィック面での表現指導を重視。また、地区の魅力を撮影した写真を元に小冊子「Zine」を編集、製本する提出要件を設定している。本年度も昨年に続き、山形市内で新しい都市化の動きと色濃く残された歴史が共存する城下町三日町、十日町、八日町の3町域を対象とし、本演習を選出した21名が各自の視点で提案に挑んだ。五十嵐日和の作品は十日町を中心に店舗と蔵、駐車場の分布を丁寧にリサーチし、かつてあった十日市の復活を機会に町の歴史と蔵への市民の関心を高め、魅力を広げていく提案。特に蔵を保存するシステム提案に言及している点が優れていた。(志村直愛)

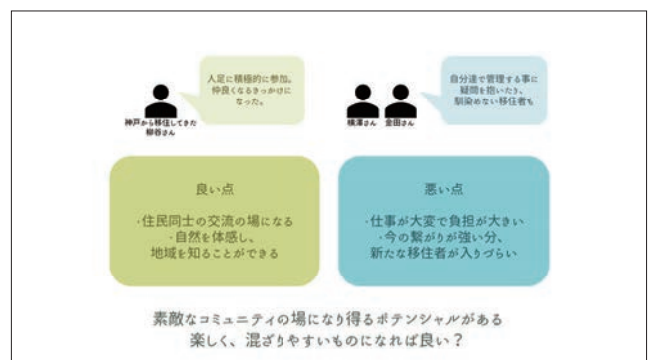


優秀作品 五十嵐日和（上） 最終講評の様子（下）

3学年 農村計画

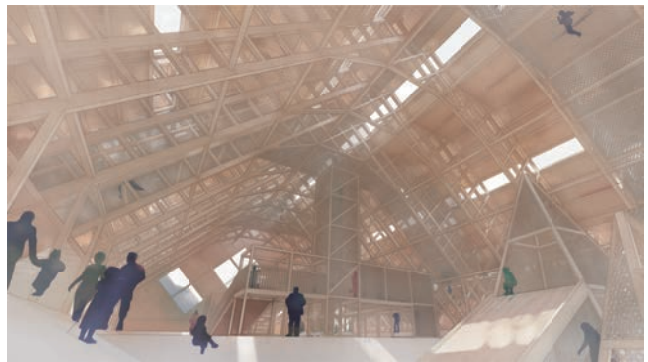
この演習では2017年度から白鷹町蚕桑地区を対象に行ってきた。今回の演習では現地の方に案内していただきながら集落のフィールドワークを行った。調査では集落の屋敷や小屋、庭、畑等を案内してもらいながら、畑仕事や食生活など集落での暮らしの様子や課題等をインタビューしている。また、学科OBである農林水産省農林水産政策研究所の飯田恭子氏からヨーロッパの地域づくりについてのレクチャーも行ってもらった。

添田はなは、こうした集落調査の結果を地域環境図として美しくまとめることで、集落の環境を魅力的に表現している。また、農村でよく住民の負担として問題になる地域共同作業「人足」をポジティブな環境活動としてとらえ、地域外の人の参加も呼び掛けてイベント化するという提案を行ったが、非常に斬新で新しい提案である。こうした学生の提案はオンラインを通して地域住民にも発表し、意見交換も行っている。(三浦秀一)



優秀作品 添田はな（上） 白鷹町での現地調査の様子（下）

この課題は、屋内型児童遊戯施設を木造により設計するというものであり、延べ床面積2,000m²でメインホールは1,000m²以上という条件が付されている。敷地は与えられた天童市街地と寒河江市郊外の2箇所からいずれかを選択する。今年度から設計における構造をしっかりと学ぶ機会を設けることを意図して、特別講師に構造設計家の木下洋介氏を迎えての演習となった。遊びという機能からアプローチする者、木構造による空間からアプローチする者、大きく二つに分かれたが、木下洋介氏からのアドバイスに、学生たちはそれらを咀嚼して次のステップに進んでいった。最優秀となった猪野航誠の作品は、格子で構成されたアーチを連続させることにより大空間を実現したが、エスキスのアドバイスごとに創意工夫を凝らして新たな展開を見出し、構造体にも遊び空間を組み込ませた秀逸な案となった。戸田巽の作品は、アーチをドーナツ型に配置した空間を複数個用いたものであり、「外に入る」と表現された屋内から屋上、時にはネットが組まれた浮遊する床を抜けて屋外に連続する空間や動画によって楽しさを伝えた点が評価された。(山畑信博)



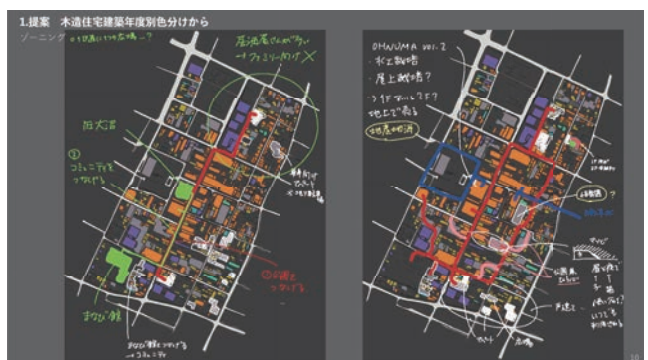
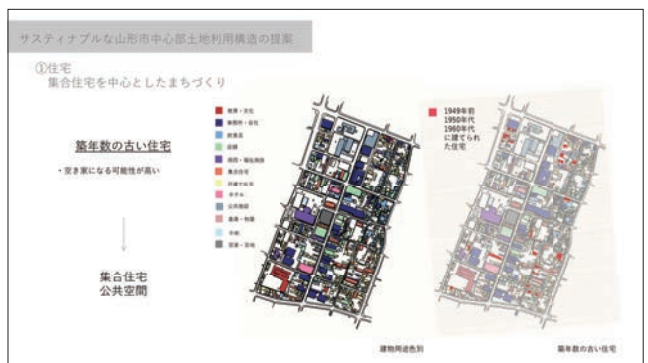
最優秀賞 猪野航誠 (上) 優秀賞 戸田巽 (下)

ドイツ在住の本学科OB永井宏治氏を講師に迎えてリモートでの指導を受けながら、ドイツの都市計画を学びながら山形市中心市街地の分析と提案を行った。

演習の流れとしては、持続可能な都市の構成要素を考え、山形市中心市街地のSWOT分析、土地利用分析、そして山形市中心部を再生するためのミクスドユース構造とその実現を困難にする構造・経済・社会・法的障害を検討するという手順で進められた。調査は前期農村計画で習得したGISを活用しながら現地の建物調査を行うことができた。

廣川琴美は膨大な都市情報の分析を行った上で、エリア毎の住宅提案、子供たちが地域を周遊できる公園づくりという魅力的な提案、そして電動キックボードやLRTまでを取り込んだ新しい交通の提案まで密度の高い内容であった。柴崎愛美は、現状と提案を比較できるプレゼンテーションが非常に分かりやすく構成されており、住宅から道路、緑地などの提案を柔らかいイメージスケッチで表現したことも効果的であった。

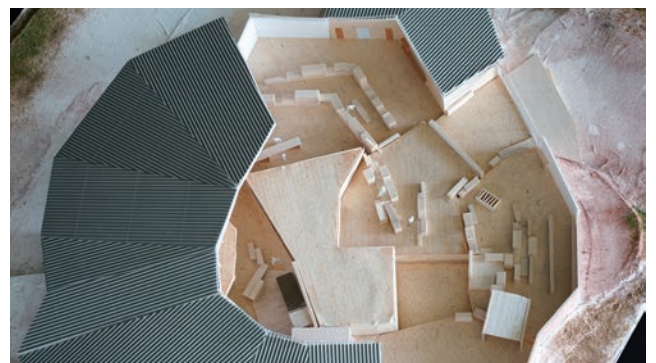
(三浦秀一)



最優秀賞 廣川琴美 (上) 最優秀賞 柴崎愛美 (下)

3学年 地域社会の核となる機能を擁した図書館

戸田巽は、山形駅付近のすずらん商店街を図書館と見立て、街に本棚が介入するように配置した。建物の中を貫通したり、道路を片ブリッジで横断したり、ダイナミックな空間構成によって、既存の街と絡み合う立体的な図書館になった。すずらん商店街の既存建築は、東北初の防火建築帯で、昭和の歴史的な遺産でもある。その文脈と空間の特徴を活かしながら、新しい要素を大胆に貫入させることで新旧のコントラストが強い建築になった。優れた造形力を持った作品である。渡部菜緒は、既存の山形市立図書館と隣接する公園を繋げた敷地に新たな図書館を設計。緩やかに傾斜する敷地形状に合わせ、微妙な高低差のある床面の連なりが、自然なゾーニングを作り出した。そこに折り重なったような屋根がかかり、その高低差がトップライトになっている。様々な角度から入ってくる光が、空間に豊かな表情をもたらすだろう。また、多角形の平面構成により、外部空間とデッキでつながったり、木々が借景に待っていたり、公園との多彩な関わり方がデザインされている。結果的に、周辺に広がる住宅地の結節点のような拠点を地域にもたらす設計であった。節点のような拠点を地域にもたらすことになった。コンパクトで、洗練された設計である。(馬場正尊)



最優秀賞 戸田巽 (上) 最優秀賞 渡部菜緒 (下)

3学年 ランドスケープ総合デザイン

風景を美しく健全にすることや、その存在意義を深めることがランドスケープデザインの1つの方向である。具体的には風景を成す土地や敷地、その他環境構成要素をデザインする。対象地は山形市郊外の岩波である。自然、土地利用、産業、歴史、文化等を階層的に読み解き、総合的な文脈として理解した上で各自が課題やテーマを導き、将来像を提案する。特別講師に廣瀬俊介氏を迎えた。

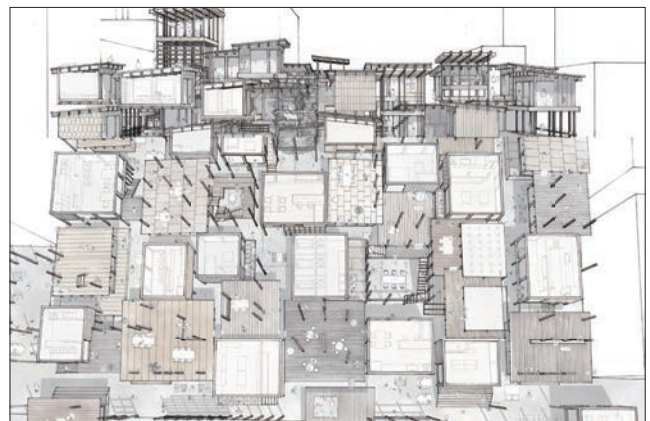
最優秀の添田はなは、集落裏手に開発された住宅地の調整池(降雨時に水の流出を調整)をリデザインした。子供の遊園を求める地域の声を踏まえ、周辺環境に馴染んでいない人工的な水路と調整池を、日常では遊びや散歩の場、降雨時は雨水の流出調整や地下浸透する空間として、自然に調和し、暮らしに価値ある美しい空間に変えて見せた。同最優秀の五十嵐日和は、集落の敷地や建物のパターンを読み解き、それをデザインコードとして共有することで、地域のランドスケープの特徴を住民が認識し、維持継承・醸成することを仕組みとして提案した。圧巻の調査に基づく本質的な提案であった。(渡部桂)



最優秀賞 添田はな (上) 最優秀賞 五十嵐日和 (下)



本研究は、衰退した都市の開発手法を路地の立体化を用いて再考察する。かつて、新潟市古町地区は新潟の中心として栄えていたが、商業施設の郊外出店や新潟駅前の発展により、衰退しつつある。特に文化的要所である古町花街の衰退を問題視する。花街では路地といったヒューマンスケールなスキマと長屋（住空間・職場）が絡み合うことにより、限界性を持って文化を育んだ。しかし、ヒューマンスケールから逸脱した、マンション開発により、そのような文化や風景は失われようとしている。さらにリサーチにより、コインパーキングの増加や風俗営業店に偏った、花街の現状が課題として挙げられた。そこでマンションという巨大なヴォリュームを、小さなユニットとして花街各所のパーキングに分散することで、小さなヴォリュームとスキマが絡み合う計画とした。テナント調査から算定したユニットや尺貫法のグリッドといった法則と、スキマの関係性で設計を行う。ユニットの床面積の差異により、平面的なスキマを生み、ユニットからアクティビティが滲み出す。さらに、屋根勾配やユニットの高度の差異が加わることで、スキマは立体化していく。立体化によってあらわれた躯体は家具、遮蔽物…とスキマの解釈をさらに輻輳させる。このようなプロセスによりスキマを計画していくことで、現在の形状となった。しかし、この姿は一時的なものである。場所性や法則、解釈の輻輳といった要素が増改築の促進することで、時間軸を持った建築として花街の文化と共にアップデートしていく。(三富俊)



卒業・修了展での展示の様子(上) ドローイング(下)

講評

新潟の高層マンションによる再開発に疑問を感じ、それに対するアンチテーゼである。高層のマンションの共用部は廊下とエレベータだけになるが、本来の町の共用部は路地で構成され、路地とそこにはみ出す人々の活動が魅力的な空間を産む。そこで彼は、階層を抑え、平面的な展開を前提とする中で、ひたすら路地のあり方をスタディした。いわば、図と地が逆転した案となる。そして、路地と生活空間は単純な対立構造として扱われるのではなく、互いを補完する関係として融合することが目指された。模型、CG、スケッチなどプロセスに対する試行錯誤を重ね、そのドローイングも含め、非常に豊かな空間ができあがった。(竹内昌義)



優秀賞 十年の被膜 百年の構造 熊谷遙奈

人間は野鳥や野草と同じく自然界の一部である。しかし私たち人間は何の躊躇もなく、自然界から隔てるように建築を作ってきた。自然界の一部である人間は、本来の生態系を乱しているのだろうか。

産業革命以来、鉄やコンクリート、ガラスなどといった化学物質を作り出し、生産性の高い建築をつくってきた。これらは生産時に二酸化炭素を多く排出し、地球温暖化を加速させている。世界中の都市にはこうした化学物質を利用した建築物で溢れている。一方で、合理性や経済性から世界各地で建築材料として使われてきた木や石、土などの自然素材の利用が廃れている。これらは祖先の時代から身体的に馴染むものとして、人々に愛されてきたものである。本制作では、一つの既存建築を通して自然素材を再度使用する方法を提示する。これからの建築の可能性を考えると同時に、放漫になってしまった人間に自然の前では謙虚にしなければならぬことを訴える都市の建築である。(熊谷遙奈)

講評

モダニズムに疑問を持つが全否定せず、建物の構造であるフレームを残しながら自然素材による時間の変化を表現した作品である。自然素材は経年変化が大きくやがては朽ちていく。その先にはまた新たなものが持ち込まれ、時とともに変化する。本作品ではその変化を臆することなく、丁寧にコマ送りのフィルムのように表現した。作者にとってのモダニズムは、取り組むべき問題ではなく、すでにあるシステムあるいは時間ともに変化しないフレームなのだと感じる。モダニズムの再生産に限界が近づきつつある現代で、循環型、サーキュラーエコノミーの具現化とも取れるこの作品は多くの示唆を含んでいる。

(竹内昌義)



優秀賞 NEO墓地 一気候変動や人口減少を踏まえた、

墓地形態及び埋葬方法の新しい選択肢の提案— 木村遥

2019年、米国で遺体の堆肥化を認める法律が成立した。世界におけるデス・ポジティブ・ムーブメントによる埋葬方法の多様化にあたり、日本に求められる持続可能な墓地の在り方とはどのようなものか。本研究は、温暖化や人口減少の社会問題を踏まえ、墓地形態及び埋葬方法の新しい選択肢を提案することを目的とする。環境に負荷を掛けない生物循環の中での埋葬方法を考えると同時に、地域におけるお墓を所有するお寺の役割を見直し、持続可能な地域コミュニティの確立を目指したデザインを提案する。ちなみに、全てを有機還元葬×樹木葬に一新するというのではなく、先進国における埋葬方法の多様化に伴い、これまでの葬送を困難とする人々や新しい方法を求める人々に向けて、選択肢の一つとして提案する。前期は、踏査やヒアリング、アンケート調査、文献調査、事例研究、地図による分析を行った。後期は、これらを踏まえて得た課題をもとに駅からのアクセスが良いこの街に新しい葬儀場および墓地を設計した。(木村遥)

講評

本作品は、埋葬方法によって温室効果ガス排出を抑制し、墓地の風景を変え、さらに墓地とそこで暮らす人々の関係を再構築する提案である。「火葬」から「有機還元葬×樹木葬」にシフトし、お寺の高い塀を取り払い、多様なアクティビティを誘発するペDESTリアンデッキでネットワークを構築することによって、暗く閉鎖的だった寺町は都市生活者の日常生活の場となり、本堂はコミュニティスペースとして自治的に運用される。葬法にまつわる様々な事象を対象とした解像度の高い提案は、時にコミカルにプレゼンテーションが展開し、死生観までも再考させられた。(佐藤充)



優秀賞 山形県庄内町家根合

—持続可能な集落の在り方についての研究— 梅津咲希

人口314人89世帯の集落。内24世帯は農家であり、私の実家もその内のひとつだ。家根合集落の農業やエネルギー面を調査し、農業を営む集落がどれだけの可能性を持っているか研究を行う。農業に関しては、慣行と有機栽培比較、農業法人の実態、家根合集落の農家コミュニティについてのヒアリング調査を行った。エネルギーでは、太陽光発電をした場合の家根合集落のポテンシャルや設置案、最上川土地改良区揚水機場での再エネ発電ポテンシャルを具体的に検討した。結果、農業では跡継ぎ問題や農業法人化の可否について課題が挙げられた。半面、エネルギーのポテンシャルはかなり高い。そのため、将来的には家根合と近隣集落の農家が農業法人を組み、集落内で発電事業を行うことが最善ではないかと考えた。また、集落外や都会の人に向けても、米のみならず電力を販売することで、外とのつながりを持つこともできる。このような仕組みが可能になれば、地方の集落が日本の“食とエネルギー”を支えていけるのではないだろうか。(梅津咲希)

講評

庄内の水田地帯の集落出身の作者が、その集落と農業を持続可能なものにするために家族や地域の農家にヒアリングをしながらも着目したのは再生可能エネルギーを生み出せないかということだった。彼女は集落の調査を重ね、集落の民家や農地を活用して太陽光発電による電気の生産をしていくことで、集落がエネルギー自立できるだけでなく、さらには電気を集落外に供給していくことも可能だということを示した。彼女のようには本学には農村環境で生まれ育った学生が多く、未来に向けた故郷の可能性を再発見できたことが最大の成果ではないだろうか。(三浦秀一)



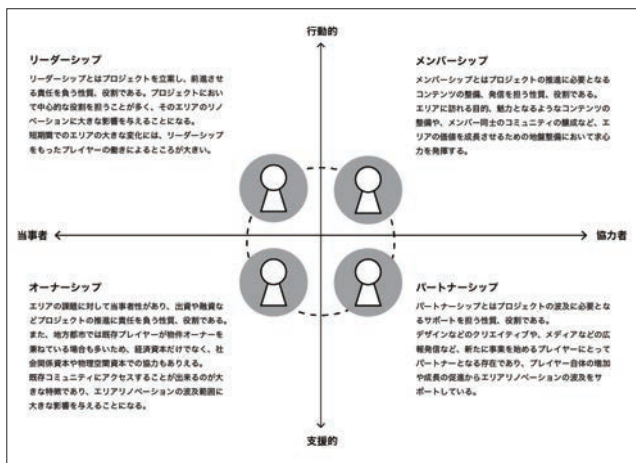
優秀賞 石巻寿町通りをまちやどに 草刈咲樹

宮城県石巻市は、豊富な観光資源と地元市民こそ知る隠れた名スポットに溢れている。震災からの復興も進み、街は以前の活気を取り戻しつつあることから、これからは石巻へ復興ボランティアではなく、観光客としてたくさんの人に訪れてほしい。そんな思いから、新しい宿泊施設「まちやど」を提案する。空き店舗となってしまった建物はリノベーション、空き地やコインパーキングには新築を設計し、新たな価値を与える。

プロジェクトは全部で5つ。A 創業約100年の老舗楽器おもちゃ店をまちやどのレセプション施設に。B 外観がお洒落なテナントビルを客室とシェアキッチンに。C 空き地に囲まれたテナントビルをひとり観光客向けの宿泊空間に。D ライブハウス横の空き店舗をオープンなバーに。E 利用者の少ないコインパーキングを銭湯に。それぞれ地元市民と観光客の交流のきっかけを設計し、各プロジェクトを繋ぐ通りのマテリアルを計画した。寿町通りをひとつの宿と見立てた、地域性溢れる宿泊施設である。(草刈咲樹)

講評

震災後の石巻の再開発をある通りを「まちやど」化することで実現しようとしたプロジェクト。震災復興はひと段落を迎え、まちなかの空洞化などの問題が大きく注目され始めた。地元で育った作者は丁寧に「まちのコンテクスト(文脈)」を拾い、建物のイメージを継承するリノベーションと新たなコミュニティが生まれる銭湯を企画した。そのイメージを実際の写真とのコラージュであたかも実現できるような錯覚に陥る表現となった。これからのまちのあり方を考えるときに、フィージビリティを含め、非常に現実的でありながら可能性を感じるプロジェクトとなった。(竹内昌義)



優秀賞 ローカルプレイヤー主導による既成市街地再生に関する研究 -3つの地方都市における手法と構造の比較- 北嶋孝祐

日本はこれまで市街地の活性化において、行政が大きな役割を果たしてきた。しかし、急激な人口減少や財政縮小により、行政を中心とした既成市街地再生を行うことは困難な状況となりつつある。特に地方都市では都市基盤が一定の規模で整備されているながら、建物の老朽化や少子高齢化などの問題が複合的に生じており、既成市街地の空洞化が進行している。このような既成市街地を、地域の民間事業者ら「ローカルプレイヤー」たちが波及的に再生する動きがある。これらは行政や既存の組合組織が主体とならない点や、独自採算で市街地再生を進めている点で、従来とは異なる既成市街地再生の動きである。そこで、本研究ではローカルプレイヤーによる既成市街地再生の取り組みの過程を、実地的、実践的な視点から調査し、エリアの漸進的変化の構造を分析した。また、その際に、ローカルプレイヤーがエリア再生に貢献する新たな主体としてどのような役割を果たすか明らかにした。(北嶋孝祐)

講評

山形市中心市街地のすずらん商店街に、自ら仲間とコーヒースタンドを開店させ、実際に事業をしながら、街とリアルに関わりながらへ書かれた論文。だからこそ、現場に立脚したリアリティがある。不確実性が高く、既存の都市計画が通用しなくなった地方都市において、新たな変化を先導するのは「ローカルプレイヤー」であると言う仮説のもと、自らを実験台にしながら、それをメタレベルから観察して書かれている。自分たちがどのようにして既存コミュニティにアクセスし、仮説的な建築や社会実験により風景をつくっていったかが的確に描かれた力作である。(馬場正尊)

優秀賞 クラシトマナビノカサナリ 鈴木雄大

仙台市のマンションやオフィスビルが立ち並ぶエリアを対象地として、都市に開いた小学校とその学校の児童の家族の住居が重なり合った空間を考える。現代における、コミュニティ問題と新たな学びのあり方について思い直し、生活のシーンをひとつひとつイメージし、それを建築に集約させていくことで、新たな暮らし、新たなまなびを考える。

コミュニティとは空間のデザインで生み出すものではなく、暮らしの「機能」のデザインによって生まれるものである。生活の機能も多様化している現代で「子育て」という機能はいつの時代も変わらないかたちであり続ける普遍性があり、これがコミュニティを「生み出す」要素であり、また、子どもの成長によって機能が弱まっていくという「一時性」が、住民達の入れ替わりのリズムをつくり、コミュニティを「保ち続ける」要素となる。

都市の隙間で始まる、小学校を核としたコミュニティの可能性。住人達のコンスタントな入れ替わりとともに、その形態もアップデートし続ける建築を提案する。(鈴木雄大)

講評

街の中に溶け込むような小学校、学びの空間が描かれている。生き生きとした教育は机上にあるより、生活の中から生まれてくると仮定し、それらが融合した場の追求がされている。部分が連なり合い全体となっている都市の風景は、20世紀が追求した均質とは逆に、多様で複雑。計画的ではなく、多くの人々が工作的に関わりながらつくられていくように見える。時代の変化の中、新たな民主性を求める、この世代ならではの空間感覚に満ち溢れていた。(馬場正尊)



賞決め審査前のプレゼンテーション（上左） 4年間の集大成となる作品を作る学生たち（上右）
 プロダクトデザイン学科教員によるゲスト講評（下左） 学生企画によるトークイベント（下右）

今年作品も芸工大らしく、かつ意欲的な取り組みが目立ったものが多かったように思う。芸工大らしさとは何か、少しここで書いてみたい。本学科は建築だけではなく、環境デザインに対し、地域との連携を取りながら真摯に向き合っているという点が挙げられる。建築を取り巻く環境は高度経済成長期のようにただ数を建てれば良いだけではなく、すでにあるストックの問題、地域社会の少子高齢化に対する問題、地球環境へのコミットメントなど、その単体だけのカタチ（いわゆるデザイン）だけではなく、全てを包括する必要がある。今年卒業設計、卒業論文を通して、そういった問題意識をベースにもち、地域の方との連携を重ねたものが多かったように思う。こうした姿勢を継続し、もっと社会に発信すべきであろう。一方で卒業設計は個人にとっての、一つのメルクマークである。クライアントワークではなく、自らの表現の限界まで挑戦し試行錯誤をすることで成長する。失敗もあるかもしれないが、それ自体も価値である。また、やり切れた人はさらにいろんな挑戦をしてほしい。そういうこだわりもまた、芸工大らしいと思うのである。（竹内昌義）

賞	氏名	作品名	分野
最優秀賞	三富俊	新潟市古町地区再生案	設計
優秀賞	熊谷通奈	十年の皮膜 百年の構造	設計
優秀賞	木村遙	NEO墓地 -気候変動や人口減少を踏まえた、墓地形態及び埋葬方法の新しい選択肢提案-	設計
優秀賞	梅津咲希	山形県庄内町家根合 持続可能な集落の在り方についての研究	論文
優秀賞	草刈咲樹	石巻寿町通りをまちやどに	設計
優秀賞	北嶋孝祐	ローカルプレイヤー主導による既成市街地再生に関する研究 -3つの地方都市における手法と構造の比較-	論文
優秀賞	鈴木雄大	クラシトマナビノカサナリ	設計
奨励賞	安達日菜	被災地建築とメッセージ性の関係 -モニュメント性を越えた新たな複合施設の提案-	設計
奨励賞	村山綾音	てづくりから生まれる地方都市空間	設計
奨励賞	野村萌夏	警鐘庵	設計
奨励賞	長谷川のか 滲		設計
奨励賞	日山莉愛	河川空間を中心としたまちづくり	設計
奨励賞	芹澤菜月	未来に続く古民家 -旧山辺街道沿いにおける古民家の分布とその価値評価-	論文



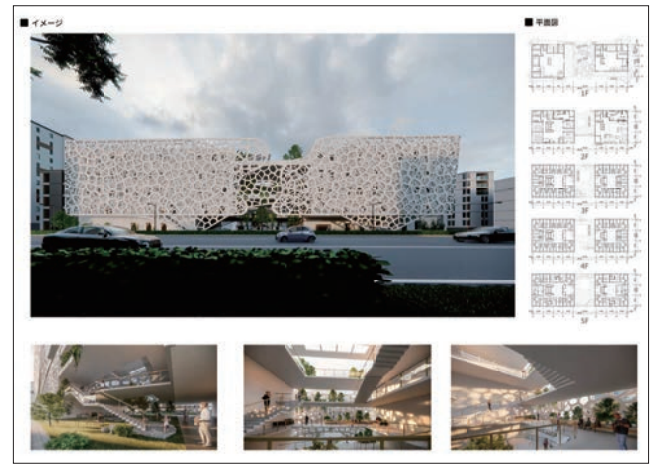
地方都市改造論2050 —地方都市におけるカーボンニュートラルを実現する方法論の研究— 小笠原一穂

講評

山形市が2050年までにカーボンニュートラル（脱炭素化）できるかどうかをデータを使いながら検証した研究である。これは国の目標でありながら、具体的なロードマップはどの自治体も描けていない。一般的な地方である山形市ができれば、汎用的な意味合いも持つ。まず、エリアを5つにわけ、その特性に応じて、地域のエネルギーのあり方を仮定した。都市部はエネルギー消費を減らし、郊外、農村的なエリアはソーラーシェアリングなどの再生可能エネルギーの導入を加速させる。住宅や建築は多くのエネルギー消費をするので、高断熱高気密化を行い、漸次ストックを入れ替えていく。このようなシミュレーションの結果、山形市は脱炭素化を達成できることがわかった。本来、これらの研究は国や自治体の研究機関で行われ、政策に反映すべきものである。それもいくつかの案を並行して検討し、最適化しながら進めていくことで、地域のビジョンが示せると考える。この案もぜひ山形市でプレゼンテーションをして、その1つとしてもらえればと思う。(竹内昌義)



プレゼンテーションボード (上)
展示風景 (下)



グリーンビルディングの研究と提案 張樹存

講評

作者はコロナ禍に入学してきた留学生である。当初、グリーンを活かしたオフィスビルのアトリウムに興味があったがそれだけでは物足りない。いわゆる高性能なグリーンビル（超高性能な温熱仕様を持ち、CO₂を排出しないビルを中国ではグリーンビルという）についての研究を併せて進めた。具体的にはパッシブハウスジャパンでの省エネルギー建築診断士の資格を取得、PHPP（パッシブハウスプランニングパッケージの略）を駆使できるようにした。さて、その知見を使いながら、修士過程で2つの大きなホテルの設計を試みた。1つは寒冷地で、もう1つは比較的温暖地での取り組みである。温暖地での建物でのポイントは日射遮蔽にある。張さんはその遮蔽をボロノイ曲線を用いてファサードを作り上げた。今後は大手の設計事務所に就職し、中国と日本を行き来するプロジェクトに関わるだろう。昨今、中国ではこのグリーンビルディングの建設が日本以上に盛んで、日本の設計事務所もそれに対応していく。その中で、その橋渡しができる設計者になっていくだろう。(竹内昌義)



プレゼンテーションボード (上)
展示風景 (下)



鮭川村空き家再生プロジェクト

活動3年目となる鮭川村空き家等利活用プロジェクト事業は、「トトロの木」として親しまれている小杉の大杉周辺のエリアリノベーションと、旧牛潜小学校の利活用についてプロジェクトを実施した。小杉の大杉エリアリノベーションは、村の観光名所として多くの観光者が来訪する一方で、ゴールデンウィークなどには交通渋滞により、近隣住民とのトラブルを引き起こしているという状況に対し、特定空家を解体し、そこに駐車場と休憩所を整備するというプロジェクトである。まず、現地を視察しエリアに埋没している「宝」を探し出し、それをどのように活かすか、学生が主体となってアイデアを出し、村に提案を行った。提案内容は、誰もが懐かしいと感じる原風景に着目し、「トトロの木」までのアプローチを「となりのトトロ」の世界観に近づけるといものである。旧牛潜小学校の利活用については、現状を把握した上で、村からの要望であるコミュニティセンターとしての活用イメージに加え、校庭をグランピング施設やドッグランに転用するという提案をしている。これら2つの提案について、地域住民とのイメージ共有を図ることを目的に「トトロのさんぽみち」「牛潜 むらの学校」という未来予想図を制作し、今年度の成果物とした。今後は、より具体的なプロジェクトとしてエリア整備の基本構想、設計へと活動を進めていく。(佐藤充)



気仙沼市大沢地区復興支援プロジェクト

東日本大震災から10年を経たが周年記念のような雰囲気には違和感がある。発災からしばらくは激動の時間があり、次第に土木的なハードの復興事業が動き出し、10年経ってそれらが一段落したようには見える。その時間と重なりながら被災地の住民は住まいを移し、最終的に住宅を再建した高台の暮らしに慣れたようにも見える。時間の経過は心の痛みを少し和らげてくれたかもしれない。しかし、ひとりひとりの心の奥底には、被災したあの日からずっと引きずっている様々な痛みがあるように感じられる。それが隠されるように、津波後の土地で新しく農業を始める人も見られ、前を向いて進んでいる住民の姿は力強くも感じる。近年はコロナ禍の影響もあり、大沢地区を訪問する機会が徐々に減ってきていたが、外からの支えが無くなることは喜ばしい状況でもある。

そんな折、防災集団移転期成同盟会から発展した大沢まちづくり協議会から連絡があり、被災した住宅の庭石を活かして慰霊碑の改修をしたいという依頼があった。コロナ禍のため教員1名、学生1名で出かけ、大沢地区からは重機の操作が可能な方々に出迎えていただき共に作業を行った。慰霊碑は、これまで整備してきた大沢カフェの傍らにある。立派な石碑が建立されていたが周囲の盛土の肩が経年で崩れていた。土留めを兼ね石碑の存在を引き立てる基壇を造ることにし、作業員それぞれが持つ技能を総合し、慎重に石の組み合わせを吟味しながら無事に収めることができた。また、余石を用いて高齢者やバスを待つ子供たちのための腰掛けも設置した。慰霊碑の改修を終え、10年という数字と被災地に流れた時間がようやくどこか繋がった感じがした。(渡部桂)



只見駅周辺魅力向上事業

只見町は福島県の奥会津に位置する自然豊かな町である。東日本大震災と同じ2011年7月に発生した新潟・福島豪雨により只見川が氾濫したことで、奥会津の生活と観光の要であったJR只見線の一部が被災し、いまだに会津川口ー只見間の27km区間が不通となっている。2022年によりやく全面開通が見込まれる中、只見町では只見駅からほど近く縁結びで知られる三石神社の魅力向上を計画し、2020年度、渡部研究室でこの神社参道の調査と設計を行った。2021年度は計画・設計に基づき、地元只見区の住民と共に参道整備に着手した。

整備は6月、9月、11月の全3回にわたり実施し、延べ63人が参加した。整備内容は主に参道の歩行性を改善する階段の設置と、茫洋とした空間の境界を明示し、来訪者の誘導に配慮しつつ管理区域を分かりやすくする境界の設置であった。資材には主に丸太と砕石を用いて人力で施工を行い、自然環境に配慮しつつ安全で歩きやすい道とした。特に急斜面箇所は上り下りに困難があったほか、参道で誘導された雨水により土砂の流亡が顕著であったため、水の勢いを抑制する意味でも階段を機能させた。また、参道脇の藪を景観整備として整理するとともに、発生した資材で柵をつくり視覚誘導に活用した。これは、今後の維持管理で発生する現地発生材の処理方法も含んでおり、将来的に美しく維持管理しやすい参道となることを目指している。今年度は山道入口付近の整備を終え、次年度は只見区の方々の参加を増やししながら山腹にある神社付近の整備にとりかかる。(渡部桂)



竹の露酒造りニューアルプロジェクト

竹の露酒造りは羽黒山から移築された1棟の蔵を中心に鉄筋コンクリート造の工場が組み合わさり、さらに増築を重ねて複雑に絡み合った構築物になっている。一方、日本酒の販売はかつてのような生産量は減り、売り方にも工夫が必要となってきている。コロナ禍による影響も大きく、新たな挑戦が求められ、酒を販売するショールームの建設が求められた。ゼミの学生らとともに見学に訪れ、酒造りに使う水や実際に酒造りをする部屋などを見せてもらった。このこだわりを表現することが求められていると感じた。一方、旧耐震基準で建てられた鉄筋コンクリートの工場の耐震性など問題点も多い。また、創業の時代からの蔵で使われている材木は立派だが、倉庫と作業場としてしか使われていない。現時点で減築と補強で耐震改修をし、創業時の蔵をリノベーションすることにした。普段から使い慣れていると価値に対して気が付かないことが多い。また、これからの未来のように時代の縮退局面においては、あるオペレーションは単なる操作ではなく、いくつにも効果のあることを同時に求められるという好例である。建設関係の資材の高騰が問題になる中、今後計画の変更もあるかもしれないが、本質的な改革を進めるべきだ。今後とも学生とともにこれからの酒蔵のあり方を考えていきたい。(竹内昌義)



蔵プロジェクト

近年活動の場としている上山市榎下宿に加えて、山形市内表の蔵の実測とイベント提案を行った。コロナ禍で2年のブランクがあり、現地にも行きづらい状況ではあったが、以前椅子・テーブルを製作した榎下宿山田屋のセルフカフェの看板を完成させた。看板はカフェ用のみならず、他のイベントの案内にも使用できるように工夫され、屋内外での設置が容易なものであり、地域の人たちに喜ばれるものとなった。(山畑信博)



小屋づくりプロジェクト

2011年から金山町旧林業センターのリノベーションや様々なイベントを行ってきた小屋づくりプロジェクトは、可動式小上がり、ドラム缶風呂、トイレ改修など、宿泊施設として蘇らせることを目論んできた。2018年にはアクセス路が崖崩れのため、2020年からはコロナ禍のため、近年は思うように活動ができないでいた。さらに豪雪と老朽化による建物維持が困難となって解体されることとなり、最後に10年間の活動記録集を制作し活動を終えた。(山畑信博)



ツリーハウス

今年度の中心メンバーは、2年前に新人の1年生として鶴岡市中央児童館でのツリーハウス製作に携わった3年生であり、1年生や2年生にとっては初めての製作経験となった。当時2年生として低学年用のツリーハウスを主導して製作した4年生は、就活や卒業制作で忙しく思うように参加できなかったが、下級生の相談役として頼もしい存在であった。年度当初は学外での活動が危ぶまれたが、合宿での作業を断念して、大学から通うことのできる距離での製作の場を探すことから始めた。上山市教育委員会に問い合わせたところ、3件ほどの候補地が挙げられ、蔵王猿倉スキー場が適任と判断し、学生たちが現地を確認して製作地とすることとなった。先方の要望はゲゲゲの鬼太郎と目玉おやじの住む樹上の家のイメージであったが、完成したツリーハウスはそのイメージ通りにできたことへん喜ばれた。今年度の製作は、学生たちのスケジュール調整がうまくゆかずに当初の工程通りには作業が進まなかった。また天候にも恵まれず、プレカットや組み立て、防腐塗装など、学内でできる作業を行って準備を進めていた。大幅に遅れた作業ではあったが、代表の近藤真椰と副代表の近野佳祐を中心として、雪深い現場で完成を目指した学生たちの努力が実を結び、竣工お披露目会の開催にこぎ着けることができた。「ひなた」と名付けられたツリーハウスは、夏でも多くの子どもたちが訪れる蔵王猿倉スキー場のレストハウス前の新たな「冒険」の場として活躍してくれることが期待される。(山畑信博)



早戸温泉環境整備実習

早戸地区は福島県三島町に位置する。2010年から始まった本実習は今年で12年目を迎える。これまでは早戸温泉から只見川沿いに延びる遊歩道の整備を中心に行ってきたが、2020年はコロナ禍により実習を断念し、オンラインによるミーティングを行いながら遊歩道の維持管理や利用促進について意見交換を行った。2021年度は、コロナ禍でも現地で実施可能な活動に取り組むこととし、日帰りで訪問した。極力住民との接触を避け、今後の活動に向けた現地調査を行った。

午前は見川沿いの早戸温泉と谷地形の上部に位置する早戸本村を結ぶ「湯坂」を踏査した。急斜面につづら折りになったこの道は、人ひとりほどの幅しかないが町道である。温泉と本村を短い距離で結ぶ生活道であり、本村の住民はこの道を歩いて行き来していた。山林の中を歩くが本村に近い区間はなだらかで歩きやすい。しかし現在は落石の危険があるほか草刈りの維持管理も要するため、かつてのような日常的な利用はない。本村の人口減少も関係している。課題は多いが、これまで只見川沿いに整備してきた遊歩道とこの「湯坂」がつながることで、温泉と本村の大きなルートを見出すことができる。道は利用しないと自然に飲まれ見えなくなる。踏査から「湯坂」の状態と早戸の大きな道のつながりを確認することができた。

午後は只見川沿いの遊歩道へのサイン設置に向け、設置場所の検討を行った。これまで遊歩道は、実習として自然と共生する空間整備の技術研修の場であったが、変化する自然を受け入れ、その変化する自然の美に触れることができる遊歩道の存在意義は、温泉を目的に来訪する観光客にも向けられている。その意義を改めて確認し、今回の調査を基に、次年度以降はサインのデザインと設置を地区と協議しながら実施してゆく。

(渡部桂)



湯野浜温泉エリアリノベーションプロジェクト

山形県鶴岡市の日本海に臨む湯野浜温泉。ここは、海と白浜に面した庄内有数の観光地だった。しかし、コロナ禍の影響で、地域の主力産業である観光が壊滅的なダメージを受けた。これを機に、近未来の温泉地のあり方を追求し、旅館単体ではなくエリア全体をリノベーションしていくプロジェクトを、本学と共に進めることとなった。

中心となる戦略は、街自体を大きな宿として捉えること。複数の旅館や観光客が共有して使える厨房やストックを持つシェアレストラン「湯野浜キッチン」を活動の拠点として整備。また、各旅館のロビーをリモートワークに対応した空間に、旧商店街の空き家を、旅館の社員のシェアハウスに。小さなリノベーションを点在して行うことにより、それではネットワークして、街全体の人々の移動を活性化する。旅館の中に囲い込まれていた観光客を、街を歩いてもらい、環境全体を体感してもらうプログラムを立てている。

また、団体旅行時代に均質化してしまった客室のデザインを刷新。大学の教授陣や卒業生を含めた建築家たちが、それぞれの個性を生かした空間へと生まれ変わらせる。

また、シーカヤックやサーフィンなど、海を使ったアクティビティーや、周辺の観光地を巡るサイクリングルートの設定など、ハードとソフトを組み合わせたサービスプログラムを組み立てている。

地域の大学生や卒業生たちが、地域の産業の未来を共につくるプロジェクトである。(馬場正尊)



山形市吉野宿地蔵堂実測調査

この調査は、山形市北西部に位置する吉野宿集落に建つ3棟の歴史的建造物の評価を含めた現況記録調査を、地元町会からの要請を受けた山形市文化振興課文化財係から本学科志村研究室に委託されたもので、文化財指定、登録を目指して、現地における建築実測、及びヒアリングによる記録を行うべく、令和3年5月から年度内5回にわたり実施した。参加者は志村直愛を中心に、ゼミ4年生6名、3年生5名である。吉野宿は、山辺街道沿いに位置する130世帯の集落で、その中心部に位置する区画に、北から阿弥陀堂、地蔵堂、稲荷神社の木造平屋建て3棟が並んで建っている。阿弥陀堂は、昭和13年の竣工。堂内に木造阿弥陀如来を安置する畳敷き30畳の大空間を持つ。かつては地域各戸の葬儀などを行う地域行事の施設であった。地蔵堂は、高欄付きの縁を巡らせた一間四方の小堂で、本尊は石造地蔵像。古文書の記録から天保9年の竣工とされ、高欄の擬宝珠や梁に元号の刻印が残っている。稲荷神社は畳10畳の広さを持つ社殿で、比較的新しい昭和38年の完成だが、登録要件の築50年を経過している。コロナ禍の学外活動制限により調査は度々延期となったが、取りあえず国登録文化財の申請要件となる3棟の平面図、全体配置図、求積表を作成し、建造物の特徴、評価をまとめた調査報告書を提出した。3棟はいずれも周辺住民の寄付により完成し、地区の共同所有管理であること、地蔵堂は江戸期に若者衆の「地蔵田」による修復資金の確保システムが確立していたこと、阿弥陀様に毎日周辺130世帯が交代で朝のご飯を供える「御仏供様」の行事が昨年まで実施されていたことなど、地域との繋がりが極めて強いことから、建造物はもとより、民俗学的な価値も高い生活文化の継承例として注目すべき事例である。今後いかにその価値を守り伝え、世代交代につなげるかなど、集落を支援する活動として引き続き関わっていくことができると考えている。(志村直愛)



環境的未来型 安居昭博氏

「サーキュラーエコノミーの実践」の著者の安居昭博さんをお招きして、環境的未来型のレクチャーを行なった。サーキュラーエコノミーとは、単なるリサイクルではなく、原料を投入する時から、その商品が持続可能性を持てるように企てる考え方である。発祥はオランダ。リサイクルよりもさらに進んだ概念としてのサーキュラーエコノミーに国をあげて取り組んでいる。例えば、サブスクリプションで料金を払えるジーンズ。修理がしやすいスマートフォン。海上に浮いた船の上に建つ建築群など。環境的な先進国でありたいがために、全く新しい取り組みをしていると指摘する。一方、同時に安居氏は日本の伝統的な建築の作り方に持続可能性を見出している。確かに何度でも使う構造であり仕上げ材料である木、再び溶かすことのできる土壁など、日本の伝統的な材料はすでにサーキュラーエコノミーとも考えられる。また、黒川温泉ではコンポストを設置し、ゴミから堆肥をつくる実験を繰り返す。サーキュラー的な取り組みは、洋服の過剰生産による大量廃棄などに対する批判から生まれてきた。そう考えると日本ではフードロスの問題、プラスチックの問題、あるいは住宅のスクラップアンドビルドの問題。伝統的な建築の話とは別に、常に大量生産、大量廃棄に陥っている。なにか根本的に見直さないといけないところまで来ている。これらの話を気負わず、丁寧に学生たちに話して下さった。良い刺激を受け取っているに違いない。(竹内昌義)



環境的未来型 ヤン・ポリフカ氏、永井宏治氏

当学科OBでドイツ在住、プランニング事務所ene techs代表の永井宏治氏と、その朋友でもあるアーヘン工科大学都市計画学科教授ヤン・ポリフカ氏を招いて「ドイツの都市計画と中心市街地最新動向」と題するオンライン講演会を2021年10月19日に行った。日本でも都市計画の理想形として紹介されることの多いドイツの情報を生で聞けるというのは本当に貴重な機会である。ポリフカ教授の話から分かるのは理想と思われていたドイツでも、中心市街地の人口減少、空き店舗の問題がかなり深刻であることが分かる。今回紹介されたドイツの町では、活気を失った商店街の存続を断念し、脱商店街化の支援を行うという例もあり、現実的合理的な英断が下されているのは衝撃的であったが、これが都市計画というものかもしれない。

それに対してアーヘン工科大学都市計画学科の学生たちが具体的な改善提案を行っている事例を紹介していただいたが、その内容は都市計画的な調査から、建築のプランニング、そして経済性の評価まで多岐にわたっているのが驚きであり、それらが実践へとつながっている。学生だけで実践まで到達しているわけではないが、自治体の基本的な方針と歩調を合わせながら、専門家のアドバイスを受けて進められており、ドイツでは自治体と大学との間に非常に良好な関係が築かれていることも分かる。その意味では本学が果たさなければならない役割のお手本を見たようであり、今後も永井氏やポリフカ教授を通してドイツとの交流を継続的に行っていきたい。(三浦秀一)

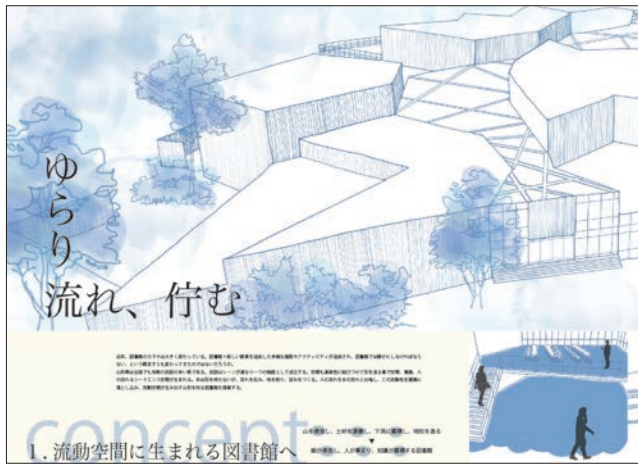


ワンデイプロジェクト 山道拓人氏

下北沢のBonus-trackの設計などで活躍中の設計ユニット、ツバメアーキテクトの建築家、山道拓人さんにワンデイプロジェクトの出題を頼んだ。建築を単純な機能としてではなく、社会における意味やコミュニティとの関係の中で構築しようとする現代的な若手の建築家である。

彼の出題は「理想の自邸」であった。コロナ禍で住まいや働き方が大きく変わっている。その状況を捉えながら、どう住むのか。社会との関わりをどうするのか。学生自身がどう暮らしているのかが問われた。かなり深いテーマである。今年はテーマの難しさに上級生有利な展開となった。低学年生はやはり、家という形式にこだわるあまりnLDKから抜け出せきれない。広義の「住む」という概念にコミットしたのは4年生である。家族との関わりを問うた作品、鈴木雄大の「家族の単位」が最優秀賞となった。家族の単位を組み合わせながら家が作られていく。そのプロセスや組み合わせ方が自邸となっていた。オープンな屋根の下に展開された開かれた空間は魅力的であった。「家」という概念は共同体の最小単位であることそのこと自体に注目し、展開する姿勢は、作者の卒業設計でも引き継がれた。このワンデイプロジェクトがその時の彼のスタンディングポイントの確認になっているかもしれないと思った。(竹内昌義)

コンクール等受賞者の紹介



最優秀賞「ゆらり 流れ、佇む」村山綾音



最優秀賞「新潟市古町地区再生案」三富俊

JIA東北建築学生賞

主催 公益社団法人日本建築家協会東北支部

- * 最優秀賞「ゆらり 流れ、佇む」村山綾音
- * 奨励賞「教室をもたない音楽大学」草刈咲樹

村山綾音の作品は図書館の設計。近年、図書館は書籍の貸し出しだけでなく、地域交流の拠点としての役割も担ってきた。作者は、建物全体を流れの速い所と瀬のように遅い所を設定し、大きな流れと佇む場所の2つを作った。本を読む、借りに来る、談笑する、各々のアクティビティが小川の水面を想像させる。透明感のある大らかな空間に仕上がった。

草刈咲樹の作品は、学生寮併設の大学を設計するという課題に応えたもの。コロナ禍での学びの変化を機に、大学の機能に「住」という概念を重ね合わせたらどうなるかという問いだ。この作品は音楽大学。大きな箱はホール、小さな箱は寮の個室。様々な大きさの立方体がホールを中心に寄り添っている。それらがずれながら配置され、音楽のようなリズムを作り出していた。(竹内昌義)



奨励賞「教室をもたない音楽大学」草刈咲樹

JIA東北学生卒業設計コンクール

主催 公益社団法人日本建築家協会東北支部

- * 最優秀賞「新潟市古町地区再生案」三富俊

コンクールで最優秀賞を取ったと聞いた時、やはりそうだろうなと思った。膨大な試行錯誤が図面や模型やCGで表され、その葛藤を踏まえた上でのプロジェクトが展開されていたら、審査員の心を打つものだからである。設計の前提条件をいくら整理しようともそれだけでは新しいものは生まれない。新しいものはなんとなくこうだったらいいなというぼんやりとしたイメージがあって、それとロジックの間を行ったり来たりすることで実際の設計も進む。一般的には頭の中の空想を繰り返すことと手の作業は別と考えがちだがそんなことはない。手で作業を行うことを厭わずに繰り返すことが求められるのである。その試行錯誤こそが設計と言える。今回の三富俊の案はまさにその点が評価されたと言えるだろう。(竹内昌義)

次世代店舗アイデアコンテスト2021 主催 丹青社

- * 受賞「アフターナインショッピング」野村萌夏

第15回長谷工住まいのデザインコンペティション

- * 受賞「自由 酸欠 終着住宅」遠藤悠

芸術工学会

- * 奨励賞「ローカルプレーヤー主導による既成市街地再生に関する研究」北嶋孝祐

せんだいデザインリーグ2021

- * 100選「十年の皮膜 百年の構造」熊谷遙菜
- * 100選「新潟市古町地区再生案」三富俊

日本建築学会賞

- * 復旧復興特別賞 建築・環境デザイン学科

東北芸術工科大学 デザイン工学部

建築・環境デザイン学科 年報2021

Tohoku University of Art and Design

Department of Architecture and Environmental Design, Annual 2021

発行日 2022年7月30日

編集 佐藤充 鮫島慧

構成 倉地亜希子

書式设计 株式会社GKグラフィックス

印刷 田宮印刷株式会社

製本 田宮印刷株式会社

発行 東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科
990-9530 山形市上桜田 3-4-5

Tohoku University of Art and Design
3-4-5 Kami-Sakurada, Yamagata 990-9530, Japan

Telephone 023-627-2000

Fax 023-627-2081

URL <http://www.tuad.ac.jp/>

E-mail env.info@aga.tuad.ac.jp



東北芸術工科大学
990-9530 山形市上桜田 3-4-5

Tohoku University of Art and Design
3-4-5 Kami-Sakurada, Yamagata 990-9530, Japan

Telephone 023-627-2000
Fax 023-627-2081
E-mail env.info@aga.tuad.ac.jp